

大津市立北大路中学校 「自主力行」「凡事徹底」



校長室だより

平成 23 年 (2011 年) 11 月 17 日

校長 山中 一仁

気付かないところにある大事な厳しさ

11 月も半ば紅葉の季節になりました。これから冬が近づきますと、ますます寒くなりますが、体調を崩したり風邪をひかないように気をつけたいものです。

ところで、春にきれいな花を咲かせるチューリップは、ヒヤシンスのように暖かい室内での水耕栽培に適さないのをご存じですか。それは何故かと申しますと、チューリップの球根は厳しい冬の寒さがないと、しっかりと葉や花芽が成長せずに花が咲かなくなってしまうことがあるからです。

私たちが気付きにくいところで、厳しい冬の寒さがあるからこそ大切なことがおこっているという現象は他にもあります。それは、「琵琶湖の深呼吸」とも言われている「全循環」という現象です。少し以前のことになりますが、私は真夏の湖上研修に行った際、水深 50m で採取された琵琶湖の北湖の水をそのまま飲んだことがあります。その水は見た目にも実際にも、とてもきれいだっただけでなく、真夏の炎天下にもかかわらず、9℃ という真冬と同じような冷たさでとてもおいしく感じました。春から秋にかけては琵琶湖の水面の温度は、気温や太陽光の熱で温められて高くなりますが、水面から 10m から 15m くらいの深さになると水温は急激に下がります。特に水深 40m より深いところでは夏でも水温が 10 度より少し低い状態になっています。ところが、表層の温められた水は、冷たい水より軽いので、深いところにある冷たい水と混じることはありません。もし滋賀県が年中温かくなってしまうと、琵琶湖の水は表層の水と深いところの水が混じり合わないことになります。

ところで、魚は水中にとけている酸素がないと呼吸できなくなり死んでしまいます。表層の水は空気と触れあっていますから酸素が多く溶け込んでいますが、深いところにもこの酸素が多く含まれた水が届かなくては、ビワマスのように冷たい水を好み、夏の間おもに深いところで生活する魚が琵琶湖で生きていけなくなるのです。琵琶湖は大きいですから 1 年や 2 年は大丈夫かもしれませんが、そのままではやがて酸素は使われてなくなってしまうのです。混じり合う必要があるのです。

その混じり合う現象を起こしてくれるのが冬の寒さなのです。冬場は、湖面にも大量の雪が降りますし、流れ込んでくるたくさんの川の水も冷やされていて、酸素を多く含んだ表層の水はとても冷たくなります。冷たい水は重いですから、湖底の方に沈んでいき、深いところの水と置き換わるように循環してくれます。これを「全循環」、あるいは、「琵琶湖の深呼吸」と呼んでいます。

私たちの生活の中にも、気付かないところにある大事な厳しさがあるのではないのでしょうか。